

豫科練



No.465 令和3年

7・8月号

- 連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.7… 2
- 連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…………… 3
- 名刺広告…………… 4
- 第54回予科練戦没者慰霊祭…………… 6
- 玉串奉納者ご芳名簿…………… 7
- 新役員紹介…………… 9
- 武器学校と予科練…………… 10
- 三四三空隊史⑦…………… 13
- 南太平洋に桜散る…………… 15
- 死線を越えて④…………… 16
- 豫科練の戦争 翼を奪われ陸戦特攻隊へ④…………… 19
- 孫への提言…………… 21

公益
財団法人

海原会

土浦浦を立ちて海軍飛行
予科練習生を慰めてくたさ

海軍に

はつおほほ

敬事

さみらき好く

わくわく

せよ

わくわく

高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行
予科練習生を慰びてよめる

海はらに

はたおほそらに

散華せし

きみら声なく

いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 予科練の碑 No.7



土浦海軍航空隊は、霞ヶ浦空水上機隊跡に昭和15年11月15日に開隊し、土浦海軍航空隊と命名されて、飛行予科練習生の基礎教程の練習航空隊として教育を始めて、横須賀空で教育中の練習生達全員が移られて、海軍航空機搭乗員養成のメッカとなり、予科練習生には青春の思い出の強い第二の故郷ともいえる所となった。戦後、土浦空跡は陸上自衛隊武器学校となつて整備されたが、海軍時代の施設で支障のないものは保存が図られ、今なお立派に管理がされてる。

土浦空が開隊して間もなく、若い予科練習生の教育の効果を向上させるため、海軍当局は天皇陛下に行幸をお願いした。これが実現して親しく予科練習生の教育、訓練を天覧され、これを記念して碑が建立された。碑面には米艦載機による機銃掃射の弾痕がある。また予科練出身の会(財海原会)では、思い出の地にその一部を使用させて頂き、予科練記念館と「雄翔園」を設け、その中心に「予科練の碑」を建立して毎年盛大な慰霊祭が行われている。この松は、乙九期生が皇紀二千六百年を記念して植えられたもので雄飛の松と称されて、練習生には愛着された。戦後松食い虫に襲われ枯れたが、二代目が植えられて現在に到っている。

海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

遺詠

第三神風特別攻撃隊

第七桜井隊

海軍二等飛行兵曹

福田 憲海

二一歳

鹿児島県

第十五期丙種飛行予科練習生

降るにつけ

照るにつけても 思うかな

我が故郷の

父母はいかにと

昭和十九年十二月七日零戦六機で、セブを発進して、カモステ海をセブ方面に航行中の敵艦船を捕捉攻撃中戦死。

遺詠

神風特別攻撃隊第二御盾隊

六〇一空所属

海軍上等飛行兵曹

牧 光廣

二〇歳

広島県

第十六期乙種飛行予科練習生

いざ征かん

明日は御空の 特攻隊

結ぶ今宵の

夢はふるさと

昭和二十年二月二十一日彗星艦爆で、八丈島基地を発進して、硫黄島周辺近海に遊弋中の敵艦船を捕捉攻撃中戦死。

暑中お見舞い申し上げます



山本五十六海軍元帥銅像と雄翔館
元土浦海軍航空隊跡

公益財団法人

水交会

会長

赤星慶治

副会長

佐賀幾雄

理事長

杉本正彦

副理事長

河野克俊

専務理事

村川豊

事務局長

長谷川洋

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田 幸生

副理事長 岩崎 茂

専務理事 石井 光政

公益財団法人 海原会

理事長 菅野 寛也 (一般)

会長 小林 和夫 (乙19)

副会長 太宰 信明 (甲14)

顧問 池 太郎 (一般)

顧問 六車 昌晃 (一般)

副理事長 酒井 省三 (一般)

副理事長 安井 剛 (一般)

理事 平野陽一郎 (一般)

理事 保坂 俊雄 (乙23)
(広報担当)

理事 篠田 輝男 (一般)
(企画担当)

理事 山下 桂子 (一般)
(企画担当)

理事 湯原豊一郎 (一般)
(観ヶ浦支部長)

理事 星指 隆 (一般)
(企画担当)

監事 豊岡 昭 (甲16)

参与 行方 滋子 (一般)
(観ヶ浦支部副支部長)

参与 脇田 四郎 (甲13)

暑中お見舞い申し上げます

(公財)海原会・理事長
零戦愛好会・会長

菅野寛也

〒420-0865 静岡市葵区東草深町一五五
☎〇五四―二四五―二五二八

(公財)海原会・評議員
三重空甲十二期会・代表幹事

久保山賞一

〒116-0014 荒川区東日暮里五六一九〇九
☎〇三―三八〇七―六〇二六

(公財)海原会・評議員
予科練二十四期会世話人代表

岩館芳雄

〒189-0002 東村山市青葉町三三三三二八
☎〇四二―三九九―二四五七

(公財)海原会・監事
土空甲飛十六期

豊岡 昭

〒125-0052 葛飾区柴又四一三三二八
☎〇三―三三六―五七〇九七二

予科練特飛十期会会長

佐藤建次

〒234-0051 横浜市港南区日野四一四三二二
☎〇四五―一八四―二一三六七二

(公財)海原会・理事・広報担当
予科練二十三期会会長

保坂俊雄

〒182-0001 調布市緑ヶ丘一四四一三三
☎〇四三―二四六―四七八八

「人と自然が作る楽しい」

茨城県稲敷郡阿見町

東洋一と言われた霞ヶ浦航空隊に、若き雛鷺の音がこだましました。

土浦海軍航空隊は、いま人口四万七千人の町の大きな歴史財産になっています。

阿見町は、現在福祉、緑の保全、生涯学習などに力を入れ、住民参加の町づくりを、積極的に進めています。

穏やかな霞ヶ浦、町中にあふれる桜の花が、今も静かに鎮魂の意を捧げています。予科練の歴史を後世に奇与するため、阿見町は

「霞ヶ浦平和記念公園」を整備し、平和のシンボル「予科練平和記念館」を建設し、開館しました。平成二十二年二月一日



第五十四回

予科練戦没者慰霊祭が

しめやかに執り行われました

昨年に引き続き本年も、出席者を限定した形での、第五十四回予科練戦没者慰霊祭が令和三年五月二十九日(土)午前十時五十分、雄翔園予科練二人像前で開催されました。

式には、全国のご遺族を代表されて乙飛第六期生故海軍中尉小坂橋博司様の大甥五井秀之様が、海原会からは小林和夫会長(乙飛十九期生)、菅野寛也理事長を始めとする役員十八名が、武器学校からは坂本正義学校長以下六名と武器学校OB会長の宮本忠明様が、また阿見町からは千葉繁町長以下四名の皆様にご列席していただき、しめやかに執り行われました。

今年の慰霊祭を計画するにあたり実行委員会では、二つの課題をクリアーすることから始まりました。まず一つ目が、「コロナの感染が終息をしない状況において、参列者の範囲をどこまで広げるか」そして二つ目が「慰

霊式典の規模・次第をどうするか」ということでした。一つ目の参列者の範囲については、コロナの感染状況に応じていくつかの案を事前に作成し、臨機に対応することで決定されました。二つ目の式典の規模・次第については、出席者も少ないので簡素化すべきだという意見も出されましたが、「慰霊祭は戦没予科練生の慰霊のために行うものであり、出席者の多い少いで規模や次第が変化するのは本末転倒だ」という意見で大勢がまとまり、可能な限り例年通りの規模と次第で行おうという結論に至りました。しかしここで課題になるのが経費の問題です。例年は参加者の皆様からの会費を充当させていただいていますが、今年はその会費が全く期待できません。規模を例年に近づければ近づけるほど出費がかさんでしまいます。そして、この実行委員会として板挟み状態を解決したのが、今回初めて全国の会員の皆様に募らせていただいた玉串でした。昨年の慰霊祭後に会員の皆様から出された「自分

たちも慰霊祭に関与できる方策を検討して欲しい」という声にお応えする形で募集しましたが、なんと百五十名を超える皆様からご協力をいただくことができ、経費に関する実行委員会の心配は吹き飛んでしまいました。残る心配事は当日まで新たな規制や自粛の要請が出されないか、また今年は例年になく梅雨入りが早く、慰霊祭当日と前日の準備日の天気が気になるところでした。慰霊祭の二週間前から週間天気予報に一喜一憂しながら当日を迎えました。二週間前の予報では雨であった天気、二日間ともに薄日がさす薄曇りでもまさに慰霊祭日和でした。すべてが実行委員会の心配を覆す結果となり、これはきつと予科練英霊のご加護によるものに違いないとの結論に至りました。式典では小林会長が「海原会の使命は、予科練戦没者のことを未来に伝えることであり、年に一度雄翔園に集まりご英霊の前に首を垂れて、各人が自らの心に日本の平和のために何をなすべきか考える一日にしたい。」と

祭文奏上に続き、陸上自衛隊武器学校長及び千葉繁阿見町町長からお言葉を頂戴した後、ご遺族代表としてご出席いただいた乙飛第六期生故海軍中尉小坂橋博司命の大甥 五井秀之様から「予科練勇士の戦いは、私達孫の世代、そして曾孫の世代が後世に伝承していかなければならない。」と力強いご挨拶をいただきました。引き続き参加者全員で菊花一輪の献花を行い概ね予定通りの十一時四十分閉式となりました。

来年は第五十五回の節目の慰霊祭になります。全国の会員の皆様には是非ご参集いただけますよう、お願い申し上げます。

(慰霊祭実行委員会)



第五十四回予科練戦没者慰霊祭

玉串奉納者二芳名簿 五十音順

五千円	茨城県ひたちなか市	飯塚 直一様	三千円	群馬県前橋市	片岡 寛様
五千円	藍原 壮介様	千葉県八千代市	一万円	今井 貞子様	東京都品川区
五千円	東京都世田谷区	池田 守 様	一万円	群馬県太田市	加藤 正春様
五千円	明石 英次様	愛知県岡崎市	五千円	今井アサ子様	神奈川県南足柄市
五千円	千葉県千葉市	池 太郎様	五千円	神奈川県横浜市	金井 克巳様
五千円	秋山 孔孝様	群馬県館林市	一万円	岩瀬 純造様	神奈川県横浜市
五千円	愛知県名古屋市区	池田 隆 様	五千円	岩瀬 恒之様	金子 和実様
五千円	朝倉 聡 様	千葉県匝瑳市	一万円	茨城県常総市	佐々木広志様
五千円	東京都国分寺市	石井久米雄様	一万円	茨城県土浦市	東京都江東区
五千円	安部 節夫様	東京都小平市	五千円	大川 恭男様	金崎 幸夫様
五千円	茨城県阿見町	石嶋 彪 様	五千円	福岡県鳥栖市	東京都練馬区
五千円	天田 充晴様	兵庫県芦屋市	五千円	大久保浩之様	河合 正 様
五千円	東京都豊島区	石田 典生様	五千円	茨城県龍ヶ崎市	北海道札幌市
五千円	天野 尚夫様	東京都中野区	三千円	大野 敏明様	川岸 義視様
五千円	茨城県筑西市	石原 良祐様	五千円	茨城県牛久市	熊本県錦町
一万円	荒井 貞光様	岐阜県各務原市	三千円	岡野 典子様	川嶋 浩文様
五千円	東京都東村山市	磯貝浩次郎様	五千円	大阪府大阪市	群馬県渋川市
五千円	新井 禄朗様	神奈川県川崎市	五千円	長部 邦宏様	岸 英夫様
三千円	三重県松阪市	伊藤かおり様	一万円	奈良県大和郡山市	長野県千曲市
五千円	有瀧 玲子様	佐賀県有田町	五千円	尾関 南山様	北村 直也様
三千円	茨城県阿見町	井上 萬二様	一万円	茨城県北茨城市	栃木県那須塩原市
五千円	飯崎 一意様	宮城県仙台市	五千円	小野 源伯様	君島 操 様
五千円	東京都世田谷区	猪股 武俊様	五千円	東京都世田谷区	福島県南相馬市
五千円	飯田 史雄様	兵庫県神戸市	五千円	鍵和田知明様	工藤 垂穂様
五千円	茨城県阿見町	今井 昭司様	三千円	掛田 啓明様	福岡県筑前町
			五千円	茨城県つくば市	久保 和雄様
			一万円		広島県呉市
			五千円		久保 慶子様
			五千円		埼玉県羽生市

三千元	栗田林太郎様	五千元	佐怒賀一美様	一万円	神奈川県横須賀市	一万円	都築 倍彬様
三千元	千葉県香取市	五千元	東京都江戸川区	二千元	曾根 和満様	一万円	東京都千代田区
五千元	國分 迪夫様	三千元	塩澤 貞夫様	愛知県名古屋市	高木 亨 様	五千元	出口 多聞様
一万円	埼玉県さいたま市	五千元	栃木県足利市	茨城県龍ヶ崎市	高瀬龍太郎様	一万円	愛知県蟹江町
一万円	小島 啓三様	五千元	塩田光四郎様	群馬県伊勢崎市	高山 清平様	五千元	寺尾 信一様
一万円	群馬県太田市	五千元	神奈川県海老名市	高瀬龍太郎様	群馬県伊勢崎市	一万円	茨城県阿見町
一万円	後藤 末子様	五千元	柴田 一弥様	高瀬龍太郎様	高山 清平様	五千元	徳永 三好様
一万円	千葉県千葉市	五千元	埼玉県川口市	群馬県伊勢崎市	高山 清平様	五千元	茨城県阿見町
一万円	小林 和夫様	五千元	清水 亮 様	高瀬龍太郎様	高山 清平様	五千元	山形県上市市
一万円	千葉県木更津市	五千元	清水 亮 様	群馬県伊勢崎市	高山 清平様	五千元	富澤奈津子様
三千元	小林 航世様	三千元	愛知県名古屋古屋市	竹澤 正男様	長野県須坂市	五千元	神奈川県横浜濱市
三千元	山梨県韮崎市	三千元	清水香代子様	竹前 正一様	長野県須坂市	五千元	富永 誠 様
一万円	小林 昭三様	三千元	東京都世田谷区	竹前 正一様	長野県須坂市	五千元	東京都葛飾区
一万円	茨城県阿見町	一万円	白川 和美様	東京都青梅市	太宰 信明様	五千元	豊岡 昭 様
三千元	小林 正志様	五千元	福島県福島市	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	大阪府藤井寺市
三千元	京都府松崎町	五千元	白坂 忠良様	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	中西 明 様
一万円	近藤 紳 様	一万円	静岡県静岡市	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	三重県伊勢市
一万円	香川県丸亀市	一万円	菅野 寛也様	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	中野 泰志様
五千円	近藤 充世様	五千円	静岡県焼津市	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	熊本県清水本町
五千円	松永 進 様	五千円	鈴木 昭吾様	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	永光 頼光様
一万円	茨城県阿見町	三千元	神奈川県横須賀市	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	愛知県東栄町
一万円	酒井 省三様	一万円	鈴木 忠重様	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	夏目 博史様
一万円	北海道札幌市	五千円	東京都大田区	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	東京都青梅市
一万円	佐藤 忠義様	五千円	鈴木 スミ子様	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	並木 茂 様
一万円	福島県川俣町	一万円	茨城県水戸市	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	茨城県土浦市
二千元	佐藤 智子様	五千円	住谷 定 様	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	行方 滋子様
二千元	埼玉県さいたま市	五千円	茨城県常総市	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	千葉県香取市
一万円	佐藤 肇 様	五千円	茨城県常総市	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	成毛 勝義様
一万円	茨城県古河市	五千円	福岡県福岡市	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	大阪府高槻市
			園 厚 様	東京都小平市	田代 芳広様	五千元	二階堂安雄様

五千円	神奈川県逗子市	野口 忠洋様	五千円	福島 光夫様	五千円	埼玉県北本市	埼玉 清司様
五千円	茨城県茨城町	萩谷 元男様	五千円	静岡県御殿場市	五千円	宮下 久代様	三千円 東京都世田谷区
五千円	神奈川県横須賀市	長谷川和弘様	二万円	福本 貞之様	三千円	茨城県常陸太田市	脇田 四郎様
五千円	岡山県岡山市	服部 正昭様	三万円	埼玉県川越市	五千円	武藤 誠 様	三万円 立正佼成会
五千円	神奈川県横浜市	服部 正昭様	一万円	藤野 つね様	五千円	大阪府大阪市	土浦教会 様
一万円	東京都江戸川区	服部 義隆様	一万円	東京都調布市	五千円	村木 良治様	三万円 茨城県阿見町
三千元	東京都北区	濱村 守 様	一千元	保坂 俊雄様	五千円	埼玉県さいたま市	武器学校OB会様
三千元	原島 淳子様	東京都江戸川区	一万円	東京都練馬区	五千円	村松 昭男様	一万円 東京都千代田区
三千元	群馬県藤岡市	針谷 賢一様	一万円	星指 隆 様	五千円	栃木県佐野市	公益財団法人特攻隊戦没者
一万円	神奈川県川崎市	平賀 義治様	一万円	大分県大分市	三千円	森戸 政一様	慰霊顕彰会様
五千円	宮崎県延岡市	平野八代子様	五千円	堀端 優子様	五千円	北海道別海西本町	玉申料ご奉納に
五千円	茨城県阿見町	茨城県水戸市	五千円	茨城県土浦市	五千円	山内 修 様	厚く感謝申し上げます。
五千円	長野県大町市	松田 政雄様	五千円	眞島 博厚様	五千円	茨城県阿見町	陸上自衛隊
三万円	広島県広島市	松本 嘉一郎様	一万円	東京都江戸川区	一万円	八巻 羊一様	元関東補給処副処長
一万円	フアンデルドウス瑠璃様	松本 順子様	五千円	町井 善録様	二万円	栃木県足利市	星指 隆氏 理事に就任
一万円	福島県南相馬市	三浦 昇 様	五千円	埼玉県川口市	五千円	山岸 修次様	陸上自衛隊関東補給処(霞ヶ
一万円	深野 久 様	茨城県稲敷市	五千円	松井 和子様	五千円	山崎 久雄様	浦駐屯地)の副処長を最後に、
一万円	福島県原市	茨城県稲敷市	五千円	松浦 健三様	五千円	湯原豊一郎様	平成二十九年三月に退官をされ
		茨城県稲敷市	五千円	茨城県水戸市	五千円	茨城県阿見町	れた評議員会において理事に選
		茨城県稲敷市	五千円	松田 政雄様	一万円	横張 浩 様	任されました。星指氏は現在の
		茨城県稲敷市	五千円	栃木県那珂川町	一万円	兵庫県川西市	予科練ともいふべき少年工科学
		茨城県稲敷市	五千円	松本 嘉一郎様	一万円	吉川 誠二様	校生として自衛隊に入隊され、
		茨城県稲敷市	五千円	愛知県名古屋市	五千円	吉田 一則様	卒業後決意も新たに、防衛大学
		茨城県稲敷市	五千円	松本 順子様	五千円	神奈川県三浦市	校に第二十七期生として入校さ
		茨城県稲敷市	五千円	三浦 昇 様	五千円	米倉 禮子様	れておられます。防衛省本省は
		茨城県稲敷市	五千円	茨城県稲敷市	五千円	佐賀県唐津市	もちろん全国の部隊で要職を歴
		茨城県稲敷市	五千円	茨城県稲敷市	五千円	佐賀県唐津市	任され、陸将補として退官され

ました。

退官後は一兵卒として海原会に協力をしたいとの申し出をいただき、慰霊祭において一勤務員として受け付業務を担っていただきました。数年にわたる海原会への協力で会の概要をご理解いただけた本年理事に、推薦させていただきました。

「武器学校と予科練」

海原会顧問 六車 昌晃



第三十五代武器学校校長兼ねて土浦駐屯地司令の職を昨年十二月二十二日付で後任の坂本陸将補に委ね、四十一年余の陸上自衛官生活を終えました。

在任間、菅野理事長を初め海原会の皆様には駐屯地隊員一同大変にお世話になりました。心

から感謝申し上げます。ありがとうございます。ご縁がありまして、この度海原会の会員として名を連ねさせて頂くことになりました。宜しくお願い致します。平野事務局長からのたつてのご依頼があり、この度投稿させて頂きました。

私は武器学校の所在する土浦駐屯地に予科練がかつて存在していたことを大変有り難く思っています。他方で、予科練と武器学校にどのような接点があるのか、海軍と陸上自衛隊、航空部隊と地上部隊、戦闘職域と補給整備職域など共通点は少ないと感じている人もいるように思えます。しかし、武器学校と予科練の関係は、単に過去と現在において同じ場所に所在していたというだけではないと認識しています。この地に予科練が所

まず、第一点目は、国を、そして愛する人を我が命に代えても護るといふ重い「責任、使命と覚悟」を持った先達を育んだ地であるということです。

自衛官の宣誓には警察官や消防官にはない「事に臨んでは危険を顧みず」と言う言葉があります。国を護るのは人です。高性能な戦車、護衛艦、戦闘機、ミサイルがいくらあっても、これらの装備品を運用し、維持する優秀な人材がいなければ我が国を防衛することはできません。補給整備においてもしかりです。どれも専門的であり、他方、自衛隊入隊時に必要な知識・技能を有している人は我が国にはいません。このため、我が国防衛の基本の一つが人材育成です。

学校は教育機関であり、基本的な知識・技能を習得させています。しかし、人材育成で知識・技能の習得以上に重要なことが責任感・使命感・協調性・規律心・団結心などの資質の涵養であり、自己の鍛錬の習性化です。教官・助教が自衛官としての

魂を情熱をもって注入することは勿論のこと、同期生相互の錬磨、更に重要なことは自己の鍛錬を習性化することです。鍛錬と言う言葉は元々は刀鍛冶による日本刀作成の工程であり、「鍛」は熱して叩くこと。「錬」は折り曲げて伸ばすことを意味します。宮本武蔵の五輪書には、鍛錬について「千日の稽古を鍛、万日の稽古を錬という。」と記されています。千日は約三年。万日は約三十年です。鍛錬は一生涯かけての修養であり、入校間だけでなく、生涯の習性となすべきです。このため、電撃が走るような強烈な体験により自学研鑽のスイッチを自ら強く押し入れ、あらゆる困難を克服して自己の鍛錬を継続する、すなわち自己鍛錬の習性化が重要です。

この重要なスイッチの一つが「雄翔館」の研修です。同じような年齢の先達が如何に自らを鍛錬し、責任感・使命感を養い、覚悟を決め、実戦に望んだのか、多くのことを学べるのが「雄翔館」であり、予科練習生の先輩方が自らの命と引き換えに残さ

れた貴重な経験や言葉は正に至宝です。昭和二十五年の警察予備隊発足以来、陸上自衛隊は戦闘を経験した隊員はおらず、実戦を通じた宝を永久に伝えていくことが必要です。また、単に展示物として継承するだけではなく、日本の青年、特に自衛官の魂として先輩から後輩へいつまでも引き継いでいくことが極めて重要だと思えます。

「雄翔館」には部外からだけではなく、毎年全国の部隊から各学校に入校した学生が来ます。そして、武器学校入校学生や研修に来た学生は多くのことを学んで帰り、自衛官としての階段をまた一段、二段上がって営門を出て行きます。陸上自衛隊の各学校の中で、戦後に開設された駐屯地に所在する学校は勿論のこと、「雄翔館」、「雄翔園」のようにきちんと整備された場所には他にはありません。正に自衛官としての精神修養の場、道場における宝です。

次に、第二点目は、武器科のメッカであり、武器科隊員とし

ての支援精神を学ぶ道場である武器学校にとって、予科練の先輩は活きた教材だということですから。先に述べた第一点目は自衛官として共通する事項ですが、予科練は武器科隊員にとっても欠かせない存在です。

令和元年八月二十三日、市ヶ谷での陸幕長への申告後、直ちに土浦駐屯地へ向かいました。営門で警衛隊の敬礼を受け、真っ先に向かったのが、雄翔園にある予科練の慰霊碑二人像です。献花を済ませた後、雄翔館を研修しました。この時に、目に留まったのが、人間魚雷「回天」の訓練中に、整備ミスが原因で沈没し、殉職した矢崎美仁二飛曹の話でした。

我々武器科隊員は、一般に自衛戦闘として敵と戦うことはあつても、普通科隊員や戦車乗員のように直接敵と対峙して戦うことを生業としていません。第一線部隊の隊員は、我々が整備し、点検した装備品と補給した弾薬に全幅の信頼を寄せて、戦いに臨みます。機甲生徒出身で、陸曹時代に戦車部隊で勤務して

いた私は、命の懸かる戦いに信頼できない装備品・弾薬では臨めないことを良く知っています。平時の射撃競技会ですらそうです。国家存亡の時に、実戦を前に

した訓練において整備ミスで殉職された矢崎二飛曹はどれほど残念で悔しい思いをしなから亡くなったのか、痛いほど伝わりました。この想いを必ず教育に反映しなくてはならないと誓いました。

武器科装備の整備や弾薬類の補給等、武器科支援の良否は、第一線の部隊・隊員の自信や士気を左右し、戦闘結果に重大な影響を及ぼします。引き金を引いても発射しない。射撃しても狙ったところに弾着しない。アークセルを踏んでも加速せず、ブレーキを踏んでも停止しない。こんな装備品では戦えません。

武器学校の技術教育で必要なのは、知識・技能ばかりではありません。整備や補給等の支援を通じて、第一線部隊の指揮官や隊員に必勝の信念と手段を付与するのが、武器科隊員です。

「単に時間までに整備作業を終えた。要求された弾薬を交付した。」では甚だ不十分です。第一線部隊の指揮官や隊員が不安を覚えるようでは支援任務を全うしたとは言えず、ましてや身の危険を覚えることはあつてはならないことです。

武器学校の教育では武器科の若い幹部・陸曹に、第一線部隊の指揮官や隊員のために、如何に厳しい状況においても決して諦めず、いささかも手を抜くこと無く、やるべきことは必ずやり、やつてはならないことは決してしない、させないということとを叩き込むことが重要です。

その後も矢崎二飛曹の事故が頭から離れませんでした。そこで、目で見て、感じてもらい、安全管理を始め、武器科支援精神を学ぶ場として、第二教育部に「安全管理資料室」を令和二年四月に開設しました。多くの学生が教育の一環として同資料室を研修しています。装備品や整備に起因する各種事故の絶無に繋がりが、絶大な信頼を得る一助となれば幸いです。

さて、人間魚雷「回天」の整備ミスが原因で訓練中に殉職された矢崎二飛曹の話には続きがあります。その後、予科練同期生の北村十二郎一飛曹が殉職した矢崎二飛曹の遺骨を抱いて、回天で出撃し、散華しました。この時の写真も「雄翔館」にあります。真の同期生愛とは何かを教えてくださいます。この本物の同期生愛も良き教材です。

最後に、第三点目は、武器学校・土浦駐屯地と地元自治体・住民の良好な関係です。学校教育を整齐と実施するためには地元との良好な関係が不可欠です。旧陸軍・海軍の所在地の多くは地元理解が良いことが知られています。土浦駐屯地も例外ではありません。土日の射撃を伴う訓練に対しても苦情の一つもないことが良い例です。武器学校が立川駐屯地から移駐された際の大歓迎は、予科練が如何に素晴らしいのかを象徴しているので紹介します。今から約七十年前の昭和二十五年（一九五〇年）六月二十五日、

朝鮮戦争が勃発し、警察予備隊が設置されることになりました。約一年後の昭和二十六年十月一日立川駐屯地に車両整備講習所が開設されました。その後、同地に陸隊武器学校（仮称）の設立準備が開始され、昭和二十七年一月二十一日に立川で開校式が挙行され、陸隊武器学校が開設されました。

当初、火器修理、武器補給、弾薬技術、次いで装軌車整備、自動車整備のコースが設置されました。当時、立川は米進駐軍の基地であり、狭隘でした。立川では米軍に対する厳しい視線がある上、近傍の繁華街は米軍人で溢れており、決して教育にふさわしい場所では無かったようです。武器学校の移駐は、武器補給しようが立川駐屯地から霞ヶ浦駐屯地へ移転したことが一つのきっかけになったようです。当時、阿見町の第一海軍航空廠跡地では戦争中の空襲でポロポロになった施設が多数ありました。その跡地に武器補給しようの移駐が決定し、昭和二十八年

二月に霞ヶ浦駐屯地が開設されました。

陸隊武器学校の移転先を探していた担当者目に止まったのが、霞ヶ浦駐屯地の目と鼻の先にある旧土浦海軍航空隊の跡地でした。当時、日本体育専門学校（現在の日本体育大学）が利用していましたが、武器補給しようとしていたが、武器補給しようとは物の無い時代に大変便利であろうということ、また、日本体育専門学校も近々東京への移転が予定されていたことから決まったようです。

陸隊武器学校の立川から土浦への移駐に伴い、昭和二十七年八月一日に土浦駐屯地が開設されました。当時の武器学校史には当時の阿見町、土浦市の地元の皆さんの大歓迎振りが残されています。

「立川より土浦への部隊移動前後における、阿見町、土浦市当局及び町民市民の歓迎振りは阿見町、土浦市そのものが、旧海軍の航空隊及び補給しよう時代から軍もしくはそれに類する部隊に対し、永らく脳裏に深く刻

み込まれた感激から来る、憧憬が原因している様にも感ぜられた。

無論純朴な町民、市民の熱狂的に振る旗、投げるテープには何等の邪心もなく、むしろその歓迎振りには立川時代のそれと比較して身に余る光栄と重責を深く感じしめられた。予備隊誘致に関して町、市当局の払った努力は決して少なくはなかった。」

また、昭和二十七年九月十六日付の新聞には、

『予備隊堂々の市中行進で移駐の見出しの下に、

「警察予備隊土浦駐屯地部隊の土浦移駐は十五日午後一時、三個梯団に分かれ市内下高津町国立霞ヶ浦病院付近に集合、午後二時二十分歓迎花火が轟く市内を市の警察の警備車の先導で歓迎にわく土浦市の目抜き通り行進に移ったが二時三十分市役所前を通過する時は天谷市長ほか丁度そのとき市会議員達も出揃っていた市会議員達も出揃って出迎え、谷本武器学校長外隊員の乗車する車両五十台に万歳

の嵐を浴びせかけ心からの歓迎振りを示した。

前を通過する隊員も答礼をもつてこれに応じ中心街の本町、祇園町を通過する時は予備隊歓迎のために道路の両側を埋めて居並ぶ市民達と色とりどりのテープを投げかける商店街の人々との熱狂的な歓迎を受けて堂々の市中行進を行い、市民に好印象を与えて阿見の同隊本部に入った。」

とあります。この大歓迎振りは、現在では想像もつかないものですが、それほど予科練や海軍がこの地域の方々に如何に信頼されていたかの証左であろうと思います。

阿見町も土浦市も戦争末期には米軍の爆撃機や艦載機の空襲を受け、多くの人が犠牲になっています。特に昭和二十年六月十日の阿見大空襲では、武器学校の近くの鹿島神社では防空壕が爆撃を受け、三百七十人を超える犠牲者を出しています。

予科練生の負傷者や死者は、民家の戸板で土浦海軍航空隊適性部(現在の土浦第三高等学校)

へ運ばれて治療を受け、また茶毘に付されたと言われています。このように多くの犠牲者が出ているにもかかわらず、地元の情報感失われることはありませんでした。武器学校・土浦駐とん地は、予科練から引き継がれた地元の信頼という宝を大切に守り、発展させていかなければなりません。

三四三空隊史⑦

一、六月上・中旬頃(桜島上空哨戒)

発進前飛行長(多分)より、高度四千で進入、陸軍機が四機で哨戒しているから味方の合図をして高度六千で哨戒せよ、との命を受け四千で進入。しかしその前より天候悪く雨が降り出した。

桜島上空に入ると雨雲の切れ間から陸軍機四機を発見。直進してバンクを振るも(隊長機)陸軍機はグラマンと間違えたらしく空戦の態勢になった。我方も仕方なく急旋回。同位戦の形となるが、視界悪く陸軍機が見

えたり隠れたりする(右旋回)。二回目を廻った頃(私は編隊で最左端)私の左後方二百米もあつたかどうか?突然敵機を発見。直ちに私が無線で「敵機発見」と発声したと思う。事実真黒い胴体に真白い星のマーク、一番機の操縦手の顔まで見えたのだから。私は直ちに増槽タンクを落とすと同時に操縦桿を押さえた。

列機は渡辺(甲十期より甲十一期となる)である。彼はと見るとタンクを落とすため下向きで一生涯命操作している。全く私の方を見ない。敵は発見と同時に機銃を発射している。私は全く生きた心地はしなかつた。私は渡辺に「タンクはそのままですつてこい」と合図をするが一向に私の方を見てくれない。その間何秒くらいだったか、長い時間のように思えた。

ようやく気がついて操作をやめびつたり私についてきたが、その頃には敵機もはるかに遠ざかっていった(この時紫電改の速さを身をもって体験した)。また機を引起して敵を追った

が逃げられた。戦果は僅少で我方の被害は一、二機だったように思う。

一、八月八日(B-29、B-25邀撃)

大村を発進した時すでに敵機は上空にいたように思う。私は北上する編隊を追い唐津附近でP-51を撃墜、なおも北上し瀬戸内海を東進。

徳山附近で大村よりの無線が入り防府飛行場(陸軍)に着陸(同期の伊奈と共に)。私の機は掩体壕に行く途中右車輪バンクで直ちに大村に連絡。

八月十一日午後整備員二名(四〇七)が来て修理。翌十二日正午発進、大村に帰る。

その後は待機のみで出撃していかないように思う。五島方面の作戦は三度くらい行ったか?一貫して大村ではほとんどの作戦に参加していると思う。

(他の戦闘は判然と記憶していない)というのはただ一度、発進の情報が入り始動したがエンジン不調のため他の機に乗り、またまたエンジン不調でついに私だけ発進出来ずに残り残され、

その後敵戦闘機の銃撃を受け防空壕にいたがたまらず駆け出して、銃座にいた兵隊を押しつけて機銃を射つたことを記憶している。

それ以外では他の機が出撃して私が残されたことはないように思うからである。また松山で早朝発進し戦艦大和から砲撃を受けたことがある。

磯川質男二度目の戦死

原田 秀夫

予科練時代苦楽を共にした磯川君の特攻戦死の報を知ったのは、確か十九年十月も末頃だったと思う。神風特攻隊として、故海軍飛行兵曹長磯川質男と発表されたのを記憶している。

その彼が二十年四月頃、我が三四三空四〇七飛行隊に転勤してきたのである。死んだはずの彼が目前に姿を見せた時、一瞬我が目を疑った。積もる話の数々を聞き、また同期生の戦死も聞かされ、よし俺も彼等の仇を討つてやる、と心に誓ったものである。

陽気で茶目っ気で小柄な彼が四〇七では一段と目立って、日々の隊内生活を楽しくしてくれた。しかし運命は判らない。五月二十八日の空戦でついに二度目の戦死を遂げ、還らぬ人となった。

前歯が一本ソツ歯で笑うと本当に童顔であり、怒ると口をのがらせて文句を言っていた彼。家が大阪で寿司屋を経営していた由。

演芸会等にぎり寿司を握る仕事をしていたのを今でも思い出す。本当にイイ奴だった。可哀想で仕方がない。戦後大阪に出向いた時、近藤勇（同期生戦後死亡）とともに遺族を訪ねたことがあるが、快活でユーモアのある彼が今も私の脳裏に浮んでくる。

僚友二名を失なう

鈴木 昭吉

(四〇七・旧姓来本)

大関常雄上飛曹還らず

一番機市村分隊長、二番機大関上飛曹、三番機来本飛長、四番機不明。Z旗全揚にて基地を

発進。

五島列島沖周辺一帯の海上を警戒中、北上中の大型飛行艇二機を発見。高度約二千米、はるか海上を北上中。

一番機の指示により戦闘隊形をとりながら全速力で追撃。高度をぐんぐん下げる。敵も必死に逃げる。はるか前方に香岐が見える。

敵飛行艇を左に見ながら前進。前方攻撃しかない。ぐんぐん追い越して約五百米。一番機が接敵攻撃に入る。高度は〇米だ。一度しか攻撃できそうもないので思いきつてのばした。

攻撃態勢に入ろうとすると、二番機の大関上飛曹が攻撃態勢に入っていたので少し遅らせて攻撃に入る。

香岐水道であった。OPL点灯。機銃安全解除、一機しか見えないように接敵。目の前が真赤になるくらい敵弾が飛んでくる。

愛機を横滑りさせながら接敵。距離約二百米、滑りを止めて機銃のレバーを引く。四門の二十耗機銃が一斉に火を吹く。気持

ちよく弾が飛ぶ。ダグッダグッ引金を引きつぽなし。

弾が赤い尾を引きながら敵機に吸い込まれるように飛んで行く。一機、二機攻撃終了。

愛機を横滑りさせながら戦果確認すべく後方を振り向く。その時敵弾が当たる。機首が上ったと思う。座席は真っ白になり確認をあきらめ基地に帰る。

着陸後市村分隊長に報告。二番機の大関上飛曹の姿が見えず。ついに戻らず。香岐水道にて戦死。冥福を祈るのみ。着陸後被弾か所を調べる。方向舵継索片方切断。方向舵に二発、胴体に一発、通信機の電線の束が切断。よく基地に帰れたものだ。

柏谷欣三飛長竹田市に祀らる二十年五月五日、一番機市村分隊長、二番機不明、三番機来本飛長、四番機柏谷飛長。

Z旗全揚のもと基地を発進、北九州上空にてB-29十機編隊を発見。

高度五千〜六千米くらいにて接敵。一番機攻撃に入る。三番機来本攻撃態勢に入る。垂直攻撃で飛行機を背面にして刻一刻

敵機B-29に接近する。

一番機は攻撃が終ったようだが、OPLに敵機がしだいに大きくなってくる。最後尾の右端の一番機に照準を合せる。

四百米、三百米。レバーを握る二十耗四門が一斉に火を吹く。赤い線を引いて曳光弾が走る。B-29の主翼の付け根を狙う。弾が炸裂するのを確認。

攻撃を終り三番機の位置に就く。B-29が白煙を引きだした。ヤッター！思わず機上で万才。

二、四番機も編隊を組む。粕谷とは外出も一緒にした仲のよい戦友だ。

第二回目の攻撃も終り集結した時、四番機の機影は見えず。大分県竹田市の上空であった。なおも逃げる敵機を攻撃、被弾のB-29は胴体と翼が折れて火を吹き大きな輪をえがきながら墜落していった。

大村基地に着陸。一時間、二時間、粕谷飛長は帰ってこない。やっぱり戦死したのだ。本当に淋しい。戦闘機乗りは孤独だ。明日は俺の番かな、粕谷飛長の冥福を祈る。

戦後昭和五十四年五月五日、粕谷欣三飛長の慰霊碑が現地に建立された。

大分県武田市平田大字折立久藤文雄様ほか市民の皆様のご尽力によるものである。

位置 阿蘇山と大分市に各々80km位である。

心より厚く御礼申し上げます。
(合掌)

南太平洋に桜散る―

幻の叔父・山岸昌司を追って

続編Ⅱ

乙飛六期 故 山岸昌司 様

姪 平林 峰子

再び杜の都仙台へ

令和元年十一月五日、私は再び仙台を訪問しました。平成三十年十月、叔父の戦友である高橋金六さんのお墓参りのために、始めて仙台を訪問した時は、時間の余裕がなくて行くことができませんでした。

そして今回の旅の目的は、叔父と同期生であった、第六期乙種海軍飛行予科練習生、佐々木孝さんのお墓参りをする事です。

す。

そうです、一関は佐々木孝さんの故郷です。

佐々木孝さんは、大正九年三月に同地で産声をあげ、十五歳で第六期乙種海軍飛行予科練習生として横須賀海軍航空隊に入隊されました。三年間の訓練期間を終え、館山海軍航空隊、宇佐海軍航空隊、鈴鹿海軍航空隊を経て昭和十七年一月二十日、第三十五海軍航空隊（セレベス島マカッサル基地）勤務を命ぜられ、二月にマニラを目指すと

途上の事故で殉職いたしました。この年は一月下旬から沖縄・台湾方面に、二週間も低気圧が停滞し、台湾直行は無理と判断して、コースを上海（戊基地）經由に変更しました。そして、二月十九日午後一時十五分、西岡中佐指揮する第三十五航空隊八機は上海の戊基地を出発、一路高雄空を目指しました。

しかしながら、気象条件最悪の濃霧の夕暮れ時、台湾新竹三又上空にさしかかった時に悲劇は起きました。

最初に八機編隊の三番機が突然地上の高圧線に触れて炎上、一筋の炎を引きながら墜落、その直後に一、二小隊の五機が谷間の袋小路に迷い込み、大平山の中腹に相次いで激突墜落したのです。

六機の搭乗員十二名は全員爆死したのです。そのうちの一人が当時二十一歳の佐々木孝一飛曹でした。

十一月五日、仙台駅に着くと、佐々木さんの甥御さんである猪股恒一さんの懐かしいお顔が、仙台駅の改札口にありました。

猪股恒一さんは、昨年の仙台訪問時に、叔父の戦友であった仙台出身の高橋金六さんが眠るお墓を、仙台市内中のお寺をあちこち訪問しては、一基一基回って、探しだしてくださいました。

昨年は、猪股さんの案内で高橋さんが眠るお寺を訪れ、そして墓前に静かに手を合わせ、冥福をお祈りして仙台を後にしました。

翌日に山形県で開催される慰霊祭に出席することもあり、名

残惜しくもあつたのですが、来年改めて必ず猪股さんの叔父さんである佐々木孝さんのお墓参りに行こうと心に決めて山形に向かったのです。

そして一年が過ぎ、約束の日がきました。

仙台駅頭でのご挨拶もそこに、構内の食堂で昼食をす



故佐々木孝さんの墓前にて

ませ、猪股さんの車で再度高橋金六さんのお墓を訪問し、再会のご挨拶と今回の旅の安全をお願いさせていただき、車は、この旅の目的地である岩手県一関

市へと東北自動車道を一路北上しました。

一時間程で佐々木孝さんが眠る墓地に着きました。そこは、佐々木さんの生家から数分離れた、広大な畑の中にある小高い丘の上にあり、景色が良く、澄んだ栗駒の空はどこまでも青く透明で、私の故郷である長野より山がないからなのか、とても広々と感じられ、晩秋の穏やかな風が頬に心地よい静かな場所です。佐々木さんは眠っていらっしやいました。

昨年、仙台まで来たのにお墓参りがかなわなかったお詫びや、叔父の山岸の事知っていますかなど、お会い出来たら是非聞いてみたかったことを一人つぶやきながらお墓参りをすませ、仙台に戻ることにしました。

仙台へ戻る車中、私は、昭和十六年五月八日、叔父たちが見学をしたと言う青葉城址を見たくなり、猪股さんにお願ひし訪問することになりました。

仙台城は一六〇二年に初代仙台藩主伊達政宗が造営したお城で、仙台市内の西に位置し、

城の東側は広瀬川に臨む断崖、西側は御裏林（おうらばやし）と呼ばれる山林、南側を滝ノ口溪谷が取り囲むという自然の地形を巧みに利用した「山城」です。

そんな難攻不落の城を一代で造営した政宗騎像の前に立ち、眼下に広がる仙台市内を一望すると、「ここが叔父さんも来たところなんだね」とまるで八十年前にタイムスリップしたようまで、何だか不思議な気持ちになりました。

城址のところどころには、石垣が造営当時のまま残されていて、昔の石積みみの技術の高さが素人の私の目にも十分感じ取れました。



叔父山岸昌司の同期生の墓所と思いの場所を巡る今回の旅もそろそろ終わりの時間となり、猪股さんにお礼を述べ、来年五月土浦の子科練戦没者慰霊祭でお会いしましょうとお別れし、新幹線で長野への帰路につきま

おわり

死線を越えて④

海原会会員

甲飛十六期 松室 将幸

この記事は、松室将幸氏が平成二十六年に海上自衛隊小月航空基地において、航空学生の方々に講演された内容を、書き起こしたものです。

大阪では、私の家に関係のあった、大阪薬学専門学校（今の大阪薬大）という目印があったお陰で、姉には会うことが出来ました。義兄はまだ満州から帰ってはいませんでした。

しばらく姉の所にお世話になっていましたが、それぞれの事

情もあつて何時までも居候はで
きず、姉から聞き出した親戚を
訪ねたりしてはいたものの、や
はり何時までも世話になるわけ
にもいかず、中途半端にしてい
た学校の事も気になつていたの
で、一端広島に帰り、結局また、
岡組の親分さんに相談してしば
らく厄介になることにしました。

親分さんの手配で一応住むと
ころは確保できました。さらに
「松室の息子がヤクザなんかにな
つてはいけない、自立しなさい
」と言う岡さんの一言で、商
いの手ほどきを受けることにな
りました。

まず手始めは、「それ自体も修
行です」とモク（タバコの吸い
殻）拾いから始めました。恥ず
かしさに涙を流しながらも、闇
市の周りでタバコの吸い殻を拾
い集め、それを手製のタバコ巻
機で手製タバコを巻き、そのタ
バコを道路端に座つて売りさば
き、はじめて自分のお金を稼ぐ
ことを覚えたのです。

それから夜働くお姉さん方
（売春宿）の小間使いもやりま
した。

お姉さん方は気前が良く、手
間賃も弾んでくれるので懐の小
遣い銭にはあまり不自由はしな
くなりました。闇市では、何か
と面倒な事に巻き込まれた事も
有りますが、適当な所で岡組の
顔見知りの兄さん方が中に入り、
大事にならずに事を収めたこと
も度々でした。

とにかく「お金のないことは
首の無いのに等しい」という諺
にもあるように、少しでも稼ご
うと昼夜問わず普段から三種類
ぐらいの仕事を持つてがむしゃ
らに働きました。

私のモットーは「何事も一か
ら始める、元手は自分で稼ぎ、
最小限でも仕事（商い）を始め
る事のできる金を先ず貯める」
の一言です。

私は、皆さんに商売の手ほど
きをしているつもりはありませ
ん。そしてこのような話が予料
練時代の猛訓練とどのようにつ
がるのか思われるでしょう。で
すから、もう少し話を聞いてく
ださい。

ちなみに、食べ物商売は儲か
るといふことなので、まずは食

べ物商売を始めました。元手要
らずで始められる食べ物商売を
するために私が選んだ方法は、
先ず、大阪の堺市にある夜鳴き
うどんの親方に屋台の引子とし
て一週間親方について、見習い
として屋台を引き町の中を鈴を
振りながら流し歩きうどんを売
りました。

一週間で要領を覚え、「よし
一人でやろう」と決めて次の日
から前掛け一枚と包丁一本、ま
な板一枚、を持つて親方の屋台
を借りてうどんの夜鳴きを始め
ました。

屋台の一日の借り賃は百円で
した。

うどん玉二百個を準備しまし
た。割り箸代百円・行灯の脂代
二十円・かまぼこ二枚代金四十
円・練炭代三十円かかりました。
それらを合わせて、後で売り上
げから清算するのです。

売上は、一玉汁込み三十五円
で二百杯分です。

早朝、夜が明け始めて東の空
が白み始めてから行灯の灯りを
消して親方の処でその日の清算
をして手元に残ったのがその日

の収入という事なのです。

当時名の知られた大会社の課
長クラスの月給が四千円ほど
した。

大会社の課長クラスとなると
部下を連れてそれは威張つたも
のでした。よく呑み屋の帰りに
部下を連れて夜鳴きうどんを食
べに屋台に来てくれました。

私は屋台を引き始めてから一
年目に檜造りの中古の屋台を二
万円で購入して独立、その一年後
には借り土地と、屋台十台を持
つ親方になっていました。その
一年後には中古の製麵機械を買
つて、掘つ立て小屋の工場を建
て、自分の屋台で賄ううどん玉
は全て自分の工場で作っていま
した。

それからいろいろ仕事を創り
ました。

総てが上手くいったわけでは
なく、現在に至るまで二度ほど
倒産もいたしました。またまた
一から始めて現在に至つてお
ります。

お陰さまで、子供達は四人と
もアメリカ、カナダに留学させ
ることができました。

末の息子だけは、現在も独身をとおり、頭痛の種になっておられますが、私もどうにか人様に迷惑をかけずに好きな道を進んでおります。

ささやかながら社会奉仕活動も何十年か続けております。

今日まで二回の倒産を挟んで、転々と仕事も変わりましたが、その都度私の心に湧き上がる闘争心は、何時も海軍時代に叩き込まれた「負けは死に繋がりが、終わりに繋がる。勝負に勝ってこそ人は生きてゆくことが出来るのだ」という教えでした。食らいついてでも最後には勝たなければならぬ。

絶対に「負け」という言葉も「負けっぱなし」ということも許されないので。

負け、すなわちギブアップ、その言葉はいかなる局面に遭遇しても通用しないと教えられそれを硬く信じているからです。

私は戦後の混乱期に一人で苦しんだとき、何時も「負けてたまるか、ナニクソ、もう一度、もう一度」と立ち上ってきたのです。

「あの銃弾の中を生き抜いたのだから、必ず生き抜いてみせてやる」と、自分自身を叱咤激励してまいりました。

もし私に海軍でのあの鬼のような教官と悪魔の化身かと思われる助教員の指導がなかったら、到底今頃は人に踏み倒され蹴飛ばされて生きてはいなかったでしょう。

大分航空基地に転属する時あの鬼のような教官が「無駄死にするなよ」「死に急ぐなよ」と声をかけてくれたときの事が今になってしみじみと身に染みる。本当の親心だったなと思うこのごろです。

七つボタンの制服に憧れ、その夢を実現した者として、そしてまた皆様の先輩として、いまここに堂々とした皆様を見て心から誇りに思います。

組織の中では、学ぶことも多く、また頑張りがさえすれば成功の道も開けるのです。

「自分の力を過小評価するな、やればできる。」 終わります。

(ここからは、講演後に追加)

でお話をされた内容です。) 負けっぱなしの人生なんて嫌だから英語を喋らなきゃあ

海上自衛隊の隊員は、航空自衛隊・陸上自衛隊とは違うんだ

各々が外交官なのだ

だから英語を喋らなきゃあ

皆さんは既に私のプロフィールをお聞きになってご存じのとおり、私はまともに中学さえ卒業していないのです。

中学校二年の終わりで、英語を学校で習いました。

しかし、戦時中敵性語として英語の時間が極端に制限された時代でした。

私の中学では俗にいう「帰国子女」特に英語圏からの帰国二世が多く、二年生までは週三時間くらい英語の時間があつたように思います。

戦後進駐軍として占領軍が来てからは、彼らの喋る言葉がさっぱり判らず到底中学二年で習った英語が通じるわけもなく、通訳を通じて一方的な話を聞くだけで、おまけに、敗戦国の日本人は彼らのいう事全て肯定しなくてはならず、何一つ否定の

出来ない社会情勢でした。

道の向こうから進駐軍兵士が来ると、横道に逸れるか隅の方をこそそこそと逃げるように歩か、かつて日本人が経験した事のない最低、最悪の惨めなものでした。

その中であつて、ある事情で少々アルコールの匂いするアメリカ兵に絡まれ、我慢ならず体当たりでそのアメリカ兵をぶっ飛ばし、MPに逮捕され軍事裁判にかけられた事がありました。結局は無罪放免されたのですが、その経緯はともかくとして、私はその経験をとおして、彼らの言うことを、通訳を通じて聞くだけで、正直に怒りや喜びを相手に自分自身で伝えることの大切さを初めて身に染みてしみじみと感じたのです。

それから何をしても英語を習いたく、カセットテープも、テレビも録音機も無い、戦後に手に入れたコンサイス英語辞書一冊を頼りに猛勉強を始めました。機会を得てアメリカに留学する時もコンサイス英語辞書一冊だけを手に渡米したのです。

身に着けた英語が如何なる時

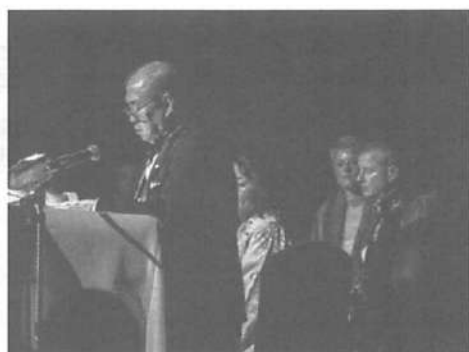
にも役にたちました。世界中の誰とでも堂々と英語で反論できること、腹を抱えて笑いあえること、日常の習慣が日本と違う人達のユーモアが理解できることなど、私は今の境遇を充分に心のそこから楽しんでおります。それから一言、平時に世界一流の武器を積んだまま地球上の国々を歴訪でき、軍装のまま平和な外国の町を闊歩できるのも海自なればこそ、一目瞭然の軍装のスマートさも海自だけのものです。即ち貴方達海上自衛官の事です。

だから海軍軍人は、海上自衛官は、世界共通語の英語を喋らなくちゃあ!

この記事を投稿された、松室将幸様は現在山口県にご健在で、海上自衛隊小月基地や米軍岩国基地において、数次の講演会を開催されておられます。

また、本人曰く最後の社会貢献活動として、自分の身に降りかかる災難を替わって受けてくれるという「身代わり人形」(古

来から四人の方に力を貸してく



米海兵隊創設 273 周年祝賀式典での講和

れると言ひ伝えられている(そう
です)を製作し、海上自衛隊小
月基地の航空学生や岩国基地の
米軍パイロットの皆さんの安全
を願って手渡しされており大変
喜ばれております。(事務局)



身代わり人形

豫科練の戦争

久山 忍 著

翼を奪われ陸戦特攻隊へ④

甲飛十四期 戸張 礼記

各自がつくる模型飛行機は実に様々で、零戦、銀河、一式陸攻、なかには霞ヶ浦で見た二式大艇まであった。

昭和二十年六月六日、夜、突然、滑降特攻隊員の募集が発表された。

「作戦の詳細は言えないが、戦局重大の折、滑空機による特別攻撃隊を募る。希望する者は用紙にその旨を書いて届け出ることに。詳細と決定者はおつて個別に通知する。熟慮の上、応募すること。以上」

分隊長はこれまで見せたことがない厳しい表情で告げた後、皆を見渡して、なお・・・、と次のことを言った。

「沖縄戦は誠に重大な段階に入った。今後は本土決戦あるのみである。土空で鍛えた予科練魂を発揮する時が来た」

皆、顔が上気している。発表

後、食卓を囲んで集まった。誰もが興奮していた。なかにはテーブルの上であぐらをかいている者もいる。

「滑降特攻隊って何だ?燃料も飛行機もねえからグライダーで突つ込むというわけか」

「まあ、そういうことだ。沖縄戦で義烈空挺隊が空から敵陣に切り込んだらう。もしかするとあれかもしれない」

田崎が興奮して声をあげた。「俺は『桜花』の搭乗員だと思う」

他の誰かが言った。この時、みんな「熱望」と書いたらしい。私もそう書いた。

その後、滑空特攻隊員の指名がないまま、八日、先に土浦から三沢に転隊してきていた甲種十四期の前期生(一次)が特攻隊員となった。私たちは特攻隊員となった甲種十四期生を帽を振って見送った。我々の期が甲種十四期の後期(二次)であるから、一つ間違えば我々の期が滑降特攻隊員に選ばれた可能性もあった。

〔三沢基地の特殊部隊〕

その部隊は天雷部隊と名乗った。任務は全国の砲術学校の精鋭から選抜された陸戦隊員(山岡部隊)と共に一式陸攻に分乗し、B 29の根拠地である、サイパン、グアム、テナアンなどに強行着陸しB 29はもちろん、飛行場施設を撃破するとともに、その地でお抵抗を続けている味方守備隊と合流、敵を急襲したあと潜水艦で密かに脱出する。さらにあわよくばB 29を奪って帰還するという奇想天外な大作戦、名付けて「剣作戦」である。最初は一式陸攻が六十機、銀河七十機を予定したが、計画どおり飛行機が集まらず、とりあえず一式陸攻六機ずつの二隊が編成された。

一式陸攻には機体番号の代りに、それぞれ「聖」「剣」「破」「邪」「必」「滅」の文字が垂直尾翼に書き込まれていた。

剣作戦の要員は海軍選り抜きの精鋭のほかに、三沢基地で編成されていた甲十四期の第一〇一特別陸戦隊(一部は次期回し

の十三期も含む)に特殊訓練を施して要員に仕立てる計画であった。

部隊員の服装は緑色で、第三种軍装に似ていたが、形は全く異なり、どう見ても米軍の整備兵そのものの服装だった。髪は全員長髪だったし、緑の服には幾つものポケットが付き、手榴弾や拳銃を装着していた。作戦の実施は七月中旬の月明時を選んで行われる予定であった。

(高塚篤著『予科練甲十三期生』天雷部隊の項より抜粋)

土空、壊滅

昭和二十年六月十三日、夜戦訓練から戻ると、いきなり、「十日早朝、数波にわたるB 29の空襲により、土浦航空隊及び霞ヶ浦航空隊は甚大なる損害を受く」という情報を聞いた。

「あの土空が、壊滅！」
一瞬、信じられなかった。突然、頭を殴られたような衝撃を感じた。しばらくは誰も声が出ない。私はすぐに故郷の家を思った。母、姉、弟たちは大丈夫

だったろうか。

(近くだから危ないかも)と心配だった。

土空には同期生や各地から集結した特攻要員の甲種十三、十四期生が残っていたし、入隊して間もない十五期生もいたはずだ。その中からも戦死者が出たのだろうか。もし我々が残っていたならどうなっていただろうか。居たたまれない気持ちにな

った。
このあと「敵機の爆撃を受け何百人もの予科練習生が爆死した」という情報を聞いた。

(戦いとはこういうものだ。戦争とはこういうものなのだ)

と割り切ろうとしながらも心が痛む。軍隊は運隊と言われる。紙一重で分かれる生死の運不運を思わずにはいられなかった。

昭和二十年七月に入った。毎日、掩体壕への誘導路の整備が続いてうんざりしていたが、やっと作業が終了した。作業は滑走路から掩体壕までの誘導路の地固めである。重いコンクリ製のローラーを皆で引っ張るのだ。慣れない作業である。他の分隊

で足を轆かれた者がいたようだ。

ローラーの数が足りないため、トラックの荷台に石を積み、ローラーで引っ張ったり後ろから押したりしてローラーの代わりにした。トラックはあっても燃料がないので人力に頼るしかない。近日、一式陸攻などの大型機が多数、飛来する予定だという。いよいよあの滑空特攻隊の出撃かもしれないと思った。そのためか、このところ基地の動きがにわかに激しくなっている。

重爆撃機の「連山」はこれまでどおり一日一回、悠然と離着陸を繰り返している。彗星、流星、銀河などの新鋭機もめまぐるしく飛び交いはじめた。ときにはどこから飛来するのか迷彩色を施した局地戦闘機「雷電」がキーンという独特の轟音を響かせて着陸し、数分後にはまた凄急角度で上昇していった。作業の合間に草いきれの上に寝ころぶ。海軍が誇る新鋭機が見られるのが何よりも楽しかった。すぐ目の前で風を切って轟音を響かせて離着陸する新鋭機は、土空に入隊して以来、未だ

叶わぬ飛行機搭乗の夢を見させてくれた。まさに垂涎の見物であった。

しかし気になることが一つあった。真つ青な空に長い飛行機雲を曳きながら高高度を飛ぶB29の機影である。B29は毎日、定期便のように飛来して津軽海峡に離脱してゆく。三沢空を偵察しているのだろうか。不気味な敵の使者に見えた。これに対する友軍機の迎撃はいつもなかった。

誘導路の作業が終了した七月十日、どこからともなく数機の一式陸攻が飛来した。それを掩体壕に入れるために曳いたり押したりしてくたびれ果てた。作業は夜中までかかった。

そんな日が続いた七月十四日の早朝、午前五時前だったろうか、空はまだ明けきっていないかった。突如、ズッシーン、ズッシーンとはらわたが抉られるような連射音が東の方で響いた。



次号に続く

孫への提言

私の戦場体験記

海原会会員 多田野 弘

私の戦場体験記は、昭和十八年七月、南太平洋の激戦地ラバウルから始まっている。二十三歳だった。連日、百機を越す戦爆連合の敵機の来襲を迎えて、二百機余いた我が戦闘機隊は迎撃撃退していた。私はゼロ戦の整備下士官として勇躍戦闘に従事していた。来襲のあるたびに、滑走路の傍に設けた土盛りの防空壕に退避したが、B24爆撃機が投下する一トン爆弾には効果が無く犠牲者が出た。やがて、我が方は人員・機材共に損傷していったが、米軍は日増しに戦力を増強し、戦況は次第に悪化していった。このままでは死を迎えるときが近いと、一兵士である私にも感じられた。

夜が来るたびに、どんな死に方をすべきかを考えるようになった。ある夜、心の奥から「祖国や家族の平和のために一命を

捨てることは、男子の本懐ではないか、喜んで前から撃たれて死ぬ」という声が聞こえてきた。あつさり死を覚悟することができた。すると忽ち、死への恐怖は消え去り、心は青天のように晴れ渡ったのを覚えている。

昭和十九年一月、彼我の戦力の差が大きくなり、戦線の縮小を余儀なくされ、我が戦闘機隊は全員サイパンに移動することになった。その内私たち二百五十名余は、二隻の貨物船に便乗して行くことになっていった。当時ラバウルは、既に空も海も米軍の勢力下に移っており、出港した船が無事に着いたためしがないほど緊迫していた。

さあ困った、船が沈めばどうやって死ねばよいのだろうかと思案する中、ふと或る考えが閃いた。水中を深く潜っていくと、水圧で失神して死ぬるを思いついた。苦しまずに死ぬる方法を思いついた私は泥のように眠ってしまった。

案の定、出港の翌日コンソリ爆撃機が一機飛来して爆弾投下され、僚船羽黒丸が直撃で舳

先を上にして目の前で沈んでいたが、我が海河丸は幸運にも至近弾であった。しかし、安心したのも束の間、翌日、我が船が魚雷を受け、私は轟音と共に吹き飛ばされた。だがどこも傷ついていなかった。機関が無事だったのか船は進んでいたが、二発目が来るのは必至とみて、何も考えずデッキから海に飛び込んだ。太平洋の波は巨大だったが、死ぬのは未だ早すぎた悠々と浮かんでいた。何時の間に来たのか、味方の駆逐艦に救助され、潜る必要はなくサイパンに着いた。両日の戦死者は三十五名であった。

サイパンでは、忘れもしない昭和十九年二月十九日、米五十八機動部隊によって壊滅されたトラツク島へ進出の命を受けた。私は数名の部下と一式陸攻(双発爆撃機)に便乗し、ゼロ戦二十数機と共に向かった。一式陸攻は速力が遅く、弾が当たるとすぐに燃えるので一式ライターと呼ばれていた。トラツク島に着く前に、グラマン戦闘機に食われてしまうだろうと思ひ、い

い死に場所を与えられたと勇んで機中の人となった。

私は、機の前部にある機銃席で、目を皿にして敵機を見張っていた。トラック島の上空に敵機は一機もいなかった。私たちが出払ったサイパン島が今、猛烈な空襲下にあるという。数日後サイパンに帰着すると、「お前は運のいいやつだなあ」と羨ましがられた。三月初旬、我が戦闘機隊はサイパン基地を撤収し、全員航空母艦千代田でペリリュー島に移動した。

ところが、三月三十日、ペリリュー島は米58機動部隊に包囲され、二日間、連日空襲を受け、我が戦闘機隊は迎撃に飛び立った。だが、初日の戦闘で全機を失い、翌日、グアム・テナアン両島の基地から応援に飛来したゼロ戦五十二機も、夕刻までに全機南溟に消えた。両日の戦死者二百四十六名を数えた。その間私たち整備員は、遊撃戦で弾や燃料を使い果たして降りてくる機に、それらを補給してまた飛び立たせる任務であった。其の度に私は「いくぞー」と叫

んで壕を飛び出し、「滑走路が俺の死に場所だ」と思って、降りてきた機に向かって駆けて行った。上を見るとグラマンの編隊がこちらを目掛けて突っ込んできた。もう滑走路上に伏せるしかない。同時に、ダ、ダ、ダと弾がコンクリートにはじける音が耳をつんざいた。体がもつと細ければと思った。

立ち上がってみると、数人の部下がついてきていたのを知ったが、誰も傷じた者はいない。続いて次の銃撃が来ぬ間にと駆け出した。皆オリンピック並みの早さだった。部下は滑走路に身を晒すと、空から狙い撃ちされるのを知りながら、誰一人としてひるむ者はいなかった。彼らは皆ラバウル以来の歴戦の勇士だった上、私の率先垂範が彼らを死地に突入させたのだと思う。

やがて、戦闘機がいない防衛力を失った島は、いつ敵前上陸されても不思議ではなかった。三十一日夜、総員集合が令され、中野司令から、「米軍上陸の公算大なり、我が隊は最後の一兵ま

で戦う」と訓示があった。私たちは僅かな武器で海岸線に布陣して敵の上陸を待った。この砂浜が俺の死に場所だと観念した。これまでラバウル・サイパンで何度も死に目に遭いながら、よくぞ生きてこられたものだ、もう年貢を納めてもいいと思うようになっていた。しかし、又もや予想に反して、ペリリュー島は翌日から、波の音しか聞こえない穏やかな日が続いた。

我が二〇一航空隊は急速、フイリピンのセブ島に移動することになった。私は特命により、ゼロ戦を中島飛行機製作所で受領して、セブ基地に空輸せよと出張を命ぜられた。パラオ基地に隠していた二式大艇(四発水上飛行艇)に便乗し、内地に向かつて飛んだ。

玉碎が予想された島から八時間経った頃、「日本に着いたぞ」の声で、機上から見た房総半島の桜に涙が止まらなかった。生きて二度と見ることはないと思っていた祖国日本に帰ることができたのである。その嬉しさは到底言葉にすることができない。

中島飛行機製作所で受領したゼロ戦は、一旦木更津基地に集合することになっていた。今だから言えるが、私は陸路移動すべからざるが、顔見知りのラバウル以来の搭乗員に頼み、ゼロ戦の胴体に潜り込んで木更津まで飛んでもらった。受領したゼロ戦数十機とともに、先導する一式陸攻に乗って、沖縄・台湾を経由しセブ基地に着いた。ところが、二〇一空本隊は、ペリリュー島からセブ基地に向かったジョクジャ丸が、魚雷を受けて沈んだことを知らされた。私は、出張のお陰で、再び太平洋で泳がずにすんだ。

セブ基地では、九月十二日、敵機動部隊の奇襲を受け、私たちが日本から空輸した新鋭のゼロ戦七十機が餌食にされてしまった。二〇一空本隊はルソン島マバラカット基地に移動することになり、私は一式陸攻で行った。同基地では十月二十五日、世界史にも残る、戦闘機に二百五十キロ爆弾を抱かせて、機もろとも敵艦に突っ込む特別攻撃隊を、日本で初めて我が隊から出

すことになった。当日、大西滝次郎司令長官と水杯を交わした特攻隊員が、操縦席から我々に手を振って出撃して往くのを、「総員、帽ふれ」で見送った。

機上の彼らの顔は、晴れ晴れとして、しかも凜として輝いてみえた。もうこれは人間業ではない、神の化身ではないかと思ふうばかりだった。私と同じ若者が、祖国の危機を救わんと、進んで命を捧げようとする姿に、震えるような感動を覚えた。私も彼らと共にフィリピンの土になろうと心に誓った。

昭和二十年一月、私は最後の戦場となったフィリピン・マバラカット基地にいた。温存していたゼロ戦は、すべて特攻として出撃し、戦闘機が一機もいない状態に立ち至った。そのような中で、傷ついたゼロ戦を一機でも飛ばそうと夜通しで修理していた。そのとき、上司から呼び出され、「今夜零時、近くのクラーク基地出発のダグラスDⅢ輸送機で、茨城県の神之池基地へ行け」と告げられた。一瞬、夢ではないかと思った。当

時の戦況から見ても、自分の死が、そう遠い先ではないと諦めていた矢先だった。また日本へ帰れるという嬉しさもあつたが、武器を持たない多くの隊員を基地に残したままである。命令とはいえ、自分の帰国に、後ろめたい気持ちがいままで残つた。

残存していたゼロ戦搭乗員と共に、ダグラス機でバシー海峡を越え、台湾・沖縄経由で日本に帰り着いた。当時、フィリピン・クラーク基地には毎日一機、双発の輸送機が日本から飛んできていたが、主として軍の高級幹部が日本との連絡に使用していた。その定員は十五名程度、帰国したい将兵が山ほどいたのに、私ごとき一下士官を便乗させてくれたのが、今も不思議に思えるのである。憶測だが、多分私の三年余の戦場における、死を賭しての働きの褒賞として、配慮してくれたとしか考えられなかった。赴任した神之池航空基地は、世界史上でも希な、ロケット推進の人間爆弾「桜花」を扱う、七二一航空隊の戦闘機隊、三〇六飛行隊だった。富高基地

に移動した我が戦闘機隊が、「桜花」を抱いて出撃する一式陸攻の護衛として出発するのを見送つた。だが、一式陸攻が鈍足のため墜落され、「桜花」は咲かないまま散つた。そのうち、広島・長崎の原爆禍があり、続いて終戦となった。

私の三年余の戦場体験は終わりを告げたが、同時にそれは、戦後に生きる私の人生を決定づけるものとなった。何度も捨てたはずの命が、ここに生きているのは、神が生かしてくれたのだと思わずにはいられなかった。ならば生かされたこの命を、世に役立たせることが、その恩に報いる唯一の道である。という考えが揺るぎないものとなり、強い自信となって、百歳になつた私の人生をつくってくれたといえる。

私が命を捨てて闘ってきたのは、国の平和と家族の平安のためだった。この体験記を、孫たちに託す平和の願いとした。

(終わり)

筆者の多田野弘氏は、昭和十四年十月航空整備科予備練習生と

して横須賀航空隊に入隊されました。昭和十六年十月応召により、谷田部航空隊に入隊、日米開戦後は、マーシャル群島ルオット基地、ラバウル基地、ニューアイランド島・カビエン基地、竹島基地、セブ基地、ルソン島マバラカット基地、神之池基地など第一戦で活躍されました。昭和十九年一月には、乗船中の海河丸が敵潜水艦の魚雷攻撃で沈没、漂流後駆逐艦に救助されるなどまさに歴戦の強者でした。昭和十九年十月には、我が国最初の特別攻撃隊である神風特攻隊敷島隊の出撃を見送るなど、いまとなっては歴史的な出来事の生き証人でもあられます。

同氏は百歳を越えた現在もお元気で、株式会社タダノ(本社香川県高松市)の顧問を勤めておられます。縁があつて海原会の会員となられ、多大のご支援をいただいております。このたび、「航海日誌」と題して同社のホームページに掲載されております人生訓の一文を紹介させていただきます。(事務局)

お墓

首都圏多数の霊園・寺院墓地をご案内致します。

東京都・足立区
舎人浄苑

在来仏教



0.90㎡～

東京都より公益霊園の認証を受けた、舎人公園近く都心でも希少な好環境の霊園。

東京都・港区
高輪メモリアルガーデン

在来仏教



0.45㎡～

都心の緑あふれる閑静な住宅街の霊園。環境・価格ともに大好評の立地です。

東京都・町田市
**町田いずみ浄苑
フォレストパーク**

宗教不問



0.90㎡～

緑豊かな武蔵野・横浜みなどみらいを一望し、四季折々の花が彩る好環境の霊園。

東京都・八王子市
東京霊園

宗教不問



3.00㎡～

四季のうつろいに永遠の時を刻む、行き届いた景観と設備の公園墓地。

お葬式

家族葬から社葬まで、おまかせください。

花で送る家族葬



10名様用

会員価格 580,000円～(+税)

ご家族だけで、または親しい方だけで気兼ねなく送りたい。そんな想いにお応えする10名様用のプランです。花祭壇は「風」と「雷」の2種類から選べます。

自社総合式場から提携斎場まで、豊富な式場をご用意できます。



- おおのやホール小平 0120-57-2222
- フェーネラルリビング横浜 0120-40-0785
- 常光閣斎場(千葉) 0120-03-5005
- セレモ埼玉営業所 0120-79-8008

お仏壇

ライフスタイルに合わせた祈りのかたちをご提供します。



海原会会員の皆様へは、墓石・葬儀(祭壇費用)・お仏壇を
会員特別価格にてご提供させていただきます。お気軽にご相談ください。

お墓 墓所工事 **10%割引**

お葬式 祭壇価格から **20%割引**

お仏壇 **25%割引**

お問い合わせは、**海原会事務局へ ☎ 03-3768-3351**

株式会社メモリアルアートの大野屋は
甲飛十四期生 元海軍一等飛行兵曹 大澤静雄の
次男 大澤静可の経営する、お墓・お葬式・お
仏壇までご利用いただける会社です。

大野屋イメージ
キャラクター
市田ひろみ



メモリアルアートの
大野屋

大野屋テレホンセンター

葬儀のご依頼(緊急ダイヤル)24時間受付
「仏事・葬儀・お墓に関するご相談 (9:00~20:00)」

0120-02-8888

メモリアルアートの大野屋
<http://www.ohnoya.co.jp>



全優品
全国優良石材店